



株式会社日本動物高度医療センター  
(東証グロース：6039)

**2024年3月期決算説明資料**

2024年5月17日

## 2024年3月期決算の総括

### 売上高 | 過去最高

- 売上高は過去最高を更新。初診数、総診療数、手術数も過去最高となる
- 大阪病院の開院に伴う一時的な費用増加等により営業利益は減益

## 2025年3月期通期見通し

### 増収増益を予想

- 初診数の増加により売上高は4,820百万円（+12.9%）、営業利益は625百万円（+25.8%）を予想
- 近畿地区全域からの症例紹介受け入れに努める

## 今後の成長戦略について

### 多角的な戦略で成長を目指す

- 人員の増強により既存病院を着実に成長させる
- 第5の二次診療施設となる新病院の物件選定を行い、開設を目指す
- 事業領域拡大を積極的に行う

## 「私たちの使命」

動物医療の「できない」をなくし、  
動物とともに生きる人の希望になる。

動物医療業界のリーディングカンパニーとしてさらに加速して事業強化を図っていくため、  
コーポレートアイデンティティをリニューアル。  
かかりつけ医など動物医療業界のステークホルダーとひとつになって、Missionに向き合っていきます。

**今後は上記Missionをもとに、事業推進・広報活動などを行っていく**

**創業時の基本理念である人材育成・臨床研究・高度医療は、  
二次診療病院の3つの柱として残している**



## 「私たちが提供する価値」

365日、かかりつけ医のすぐそばにいる  
高度医療チーム

私たちは専門性と人間味を持ち、かかりつけ医と一体感あるチームとなって、安心と納得の医療を提供しつづけます。

### 専門性

臨床を中心としながらも症例研究を積極的に行い、つねに技術や知識の向上に努めることでより確実性の高い医療と、幅広い選択肢を提供します。

### 人間味

オーナーが抱く不安や苦しみをできる限り軽減させ、ここに預けてよかったと思っただけのように、スタッフ一人ひとりが真心を込めた対応で寄り添います。

### 一体感

さまざまな専門性を持つ獣医師やスタッフが、かかりつけの獣医師とひとつのチームとなって連携しながら、ともに動物の命に向き合います。

今後は上記Valueをもとに、組織開発、サービス改善などを行っていく

- I 決算の概要**
- II 市場動向および中期成長戦略**



# I 決算の概要



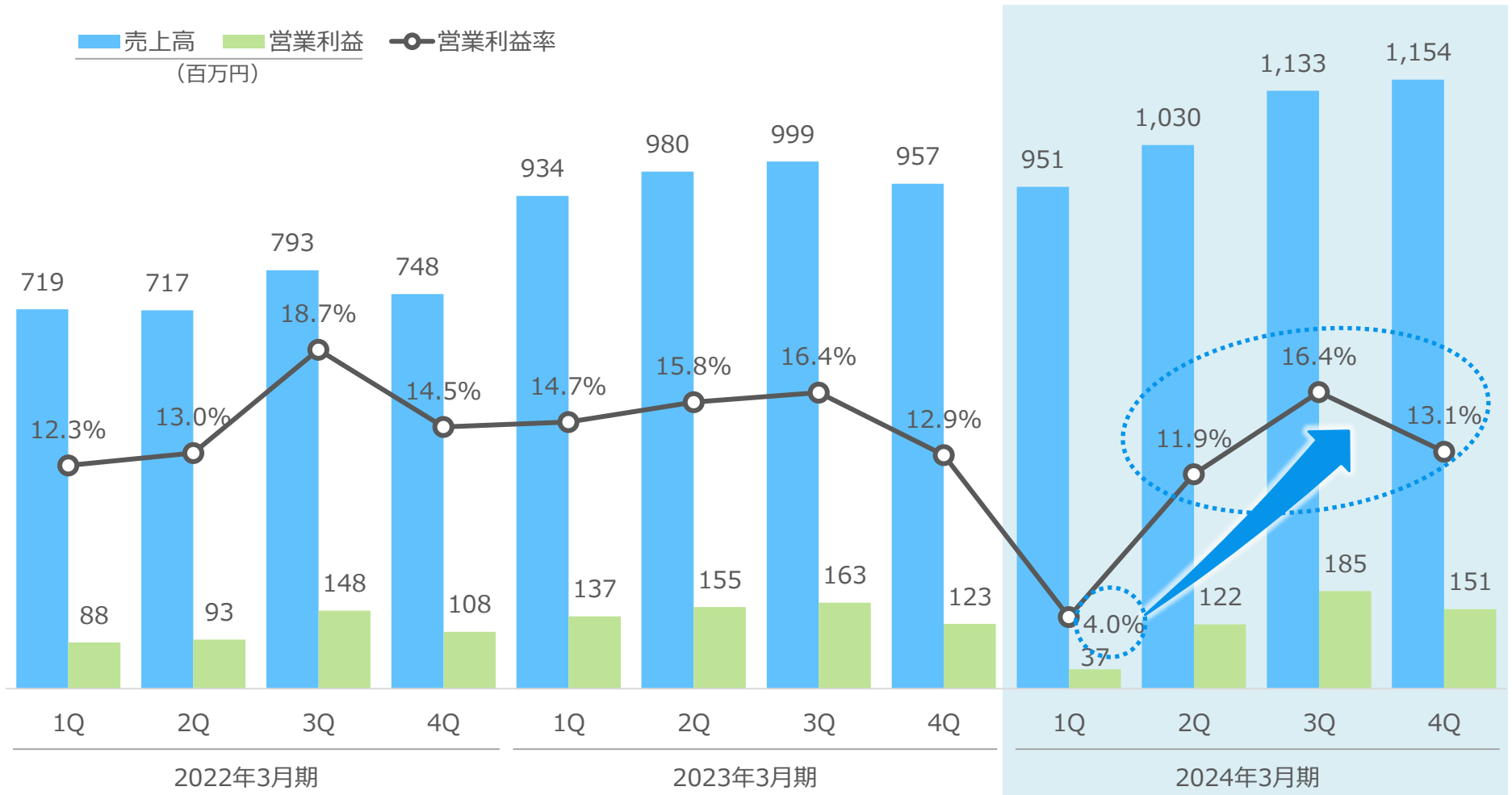
# 2024年3月期 決算概要

- 売上高は過去最高を更新するものの、大阪病院開設に伴う費用増加の影響もあり減益

(百万円)	2023/3期		2024/3期				
	実績	構成比	実績	構成比	前年比		通期計画
売上高	3,872	100%	<b>4,270</b>	<b>100%</b>	+397	+10.3%	4,140
二次診療サービス	2,594	67.0%	<b>2,917</b>	<b>68.3%</b>	+323	+12.5%	-
画像診断サービス	472	12.2%	<b>539</b>	<b>12.6%</b>	+66	+14.1%	-
健康管理機器レンタル・販売サービス	774	20.0%	<b>806</b>	<b>18.9%</b>	+31	+4.0%	-
売上原価	2,430	62.7%	<b>2,805</b>	<b>65.7%</b>	+375	+15.5%	-
販売費・一般管理費	862	22.3%	<b>967</b>	<b>22.7%</b>	+105	+12.2%	-
営業利益	580	15.0%	<b>496</b>	<b>11.6%</b>	▲83	▲14.4%	555
経常利益	534	13.8%	<b>489</b>	<b>11.5%</b>	▲44	▲8.3%	565
親会社株式に帰属する 当期純利益	380	9.8%	<b>337</b>	<b>7.9%</b>	▲43	▲11.4%	385
1株当たり 当期純利益	156.3円	-	<b>123.0円</b>	-	▲33.3円	▲21.3%	140.5円

# 四半期決算 業績推移

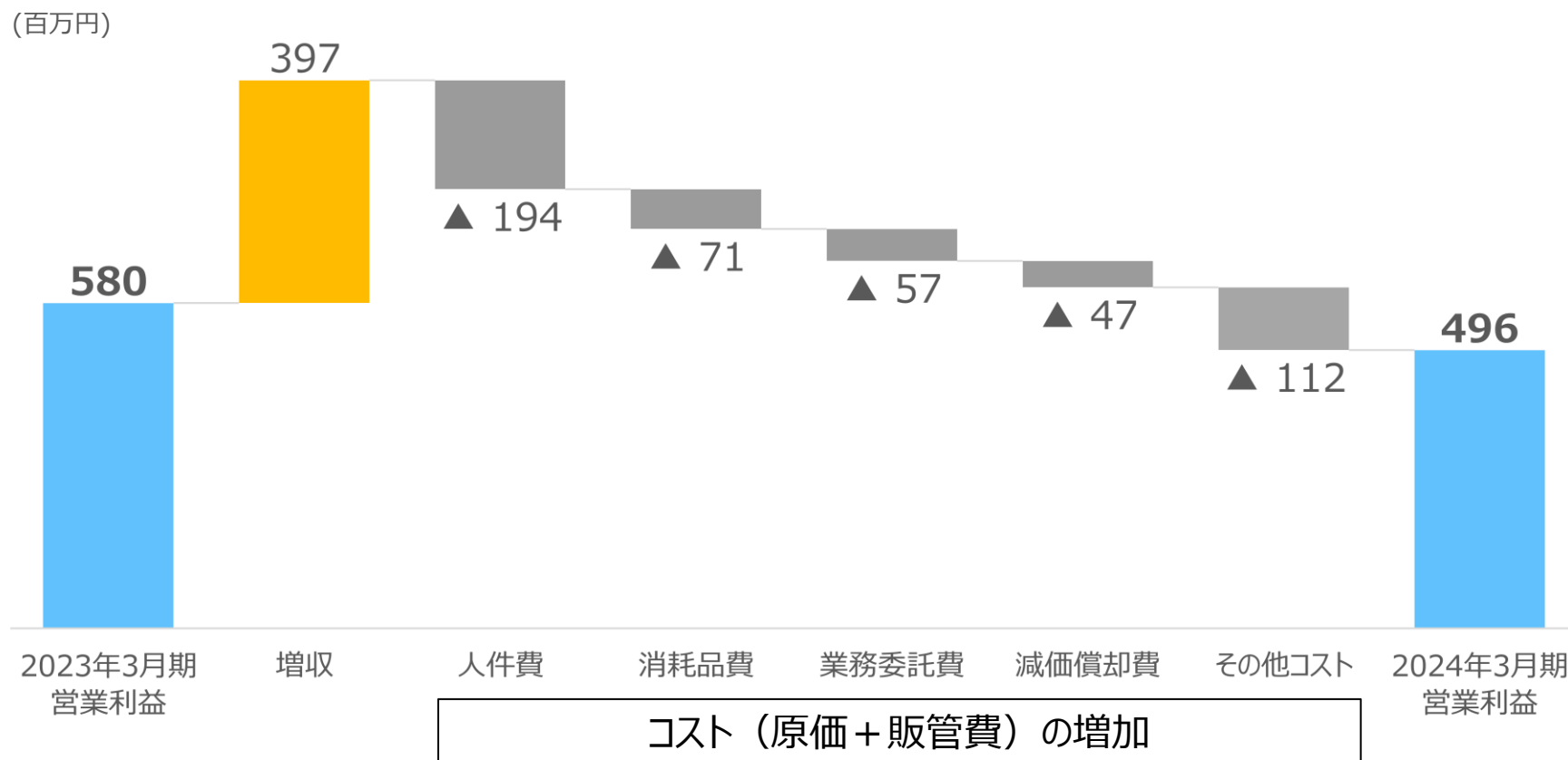
- 2024年3月期第1四半期の大阪開院時に営業利益率は一時的に低下
- 以降は売上高、営業利益とも順調に推移





# 営業利益増減要因

- 増収も、人件費、消耗品費等のコスト（原価＋販管費）の増加により減益



# バランスシート状況

- 大阪病院開院及び川崎本院放射線治療器等の取得に伴いバランスシートは拡大
- 自己資本比率は43.2%から43.5%へ改善

(百万円)	2023/3期	2024/3期	前期末比
流動資産	2,396	<b>1,777</b>	▲619
現預金	1,916	<b>1,337</b>	▲578
売掛金	263	<b>297</b>	+33
商品	95	<b>74</b>	▲20
固定資産	6,182	<b>6,992</b>	+810
有形固定資産	5,333	<b>6,151</b>	+818
無形固定資産	608	<b>548</b>	▲60
総資産	8,578	<b>8,770</b>	+191
負債	4,872	<b>4,958</b>	+85
有利子負債	3,975	<b>3,856</b>	▲119
純資産（株主資本）	3,706	<b>3,811</b>	+105
自己株式	▲171	<b>▲410</b>	▲238
負債純資産合計	8,578	<b>8,770</b>	+191

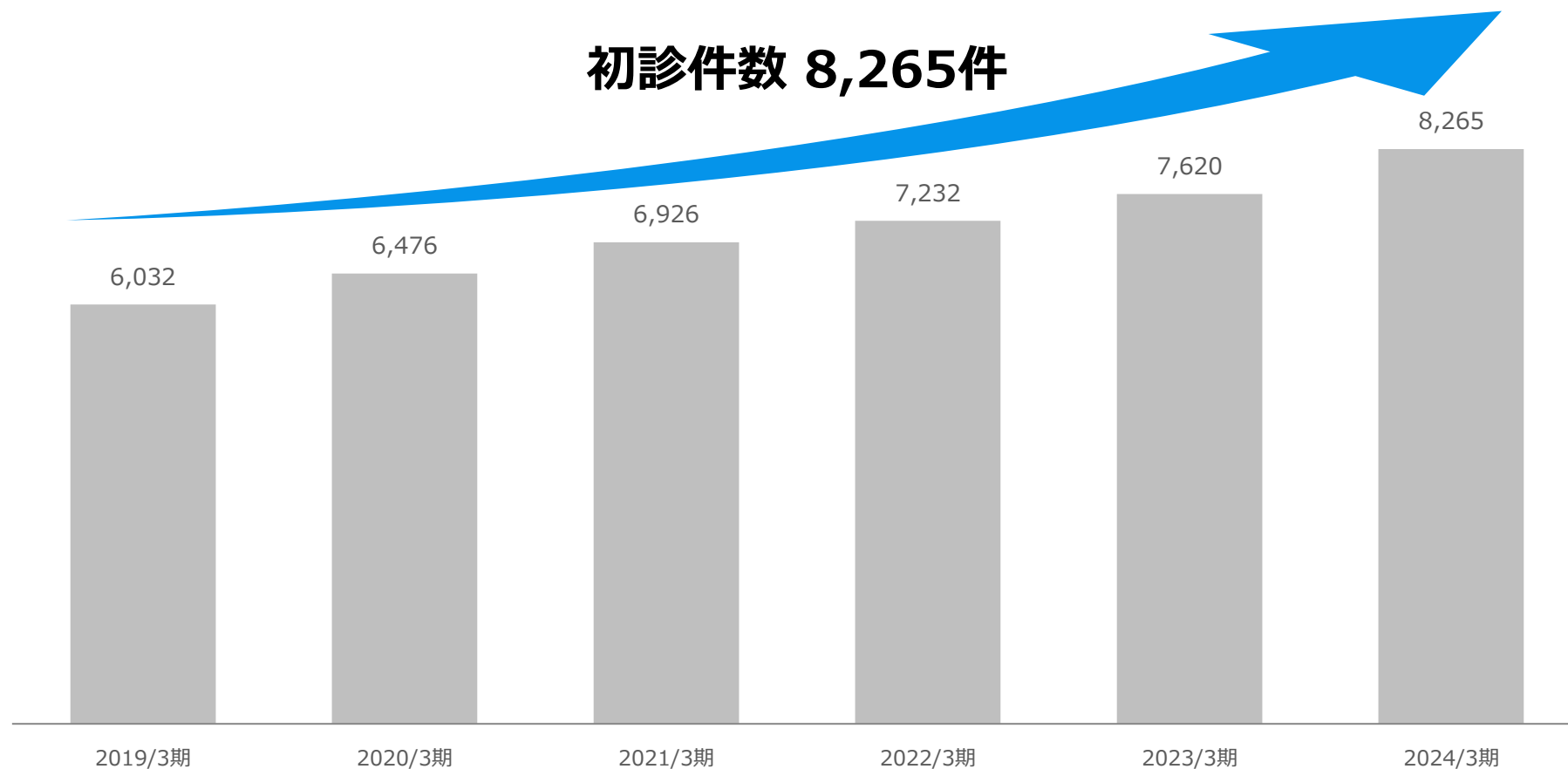
# キャッシュフローの状況

- 投資キャッシュフローは大阪病院開院と川崎放射線治療器等の取得によるもの
- 財務キャッシュフローは長期借入金の返済と、自己株式取得によるもの

(百万円)	2023/3期	2024/3期	前年比	主な要因
営業CF	810	<b>899</b>	+88	
税金等調整前 当期純利益	533	<b>491</b>	▲42	・ 営業利益減益
減価償却費	391	<b>444</b>	+52	・ 大阪開院に伴う減価償却増
投資CF	▲784	<b>▲985</b>	▲201	
有形固定資産取得	▲728	<b>▲1,041</b>	▲312	・ 大阪開院、川崎放射線治療器等取得に伴う有形固定資産取得
FCF (営業CF+投資CF)	26	<b>▲86</b>	▲112	
財務CF	820	<b>▲392</b>	▲1,212	・ 長期借入返済、自己株式取得
現金同等物の期末残高	1,816	<b>1,337</b>	▲478	

# 初診件数（紹介数）の推移

- 大阪病院の開院及び既存病院の成長により、初診件数は大きく増加し過去最高

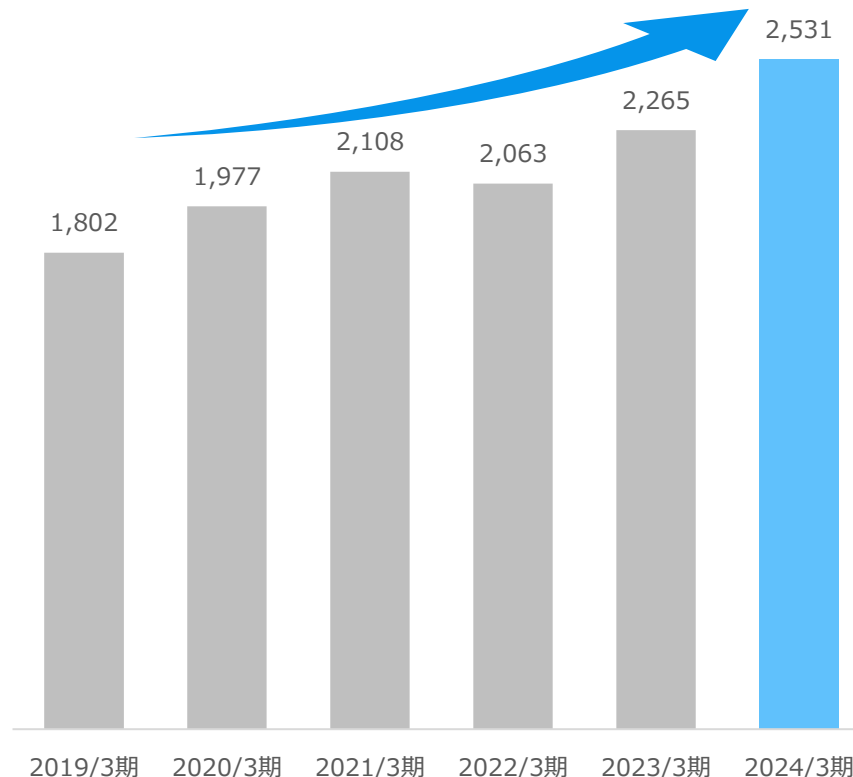
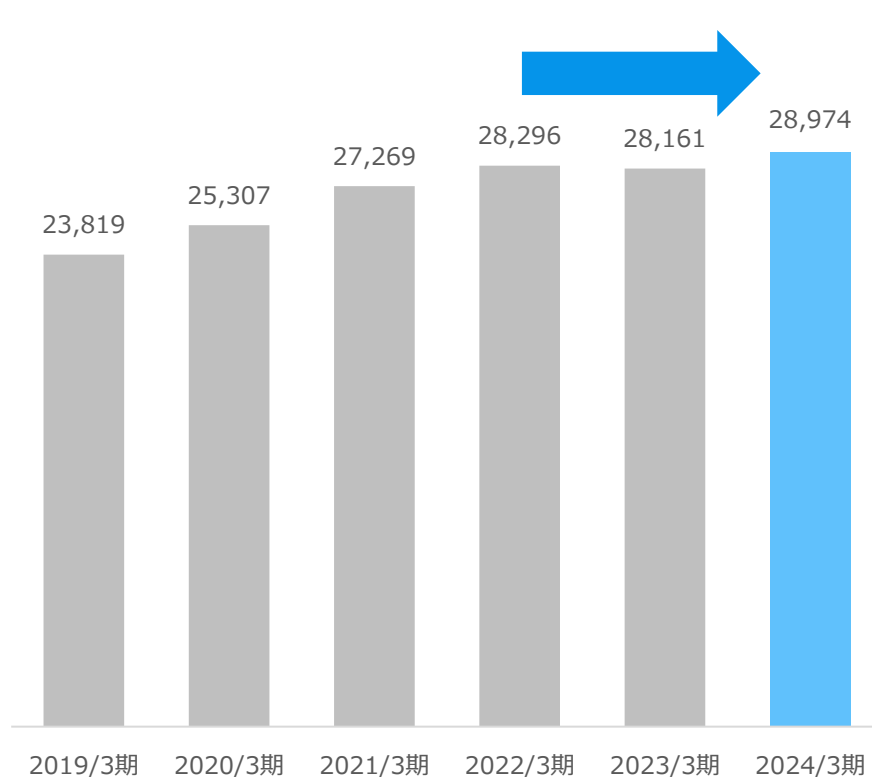


# 総診療件数、手術件数の推移

- 早期受診により再診に至らない症例が増加した結果、総診療件数は+2.9%と微増
- 一方で手術を目的とした紹介が増加した結果、手術件数は+11.7%と大幅に伸長し過去最高

総診療件数の推移

手術件数の推移



注：総診療件数は初診と再診の合計数

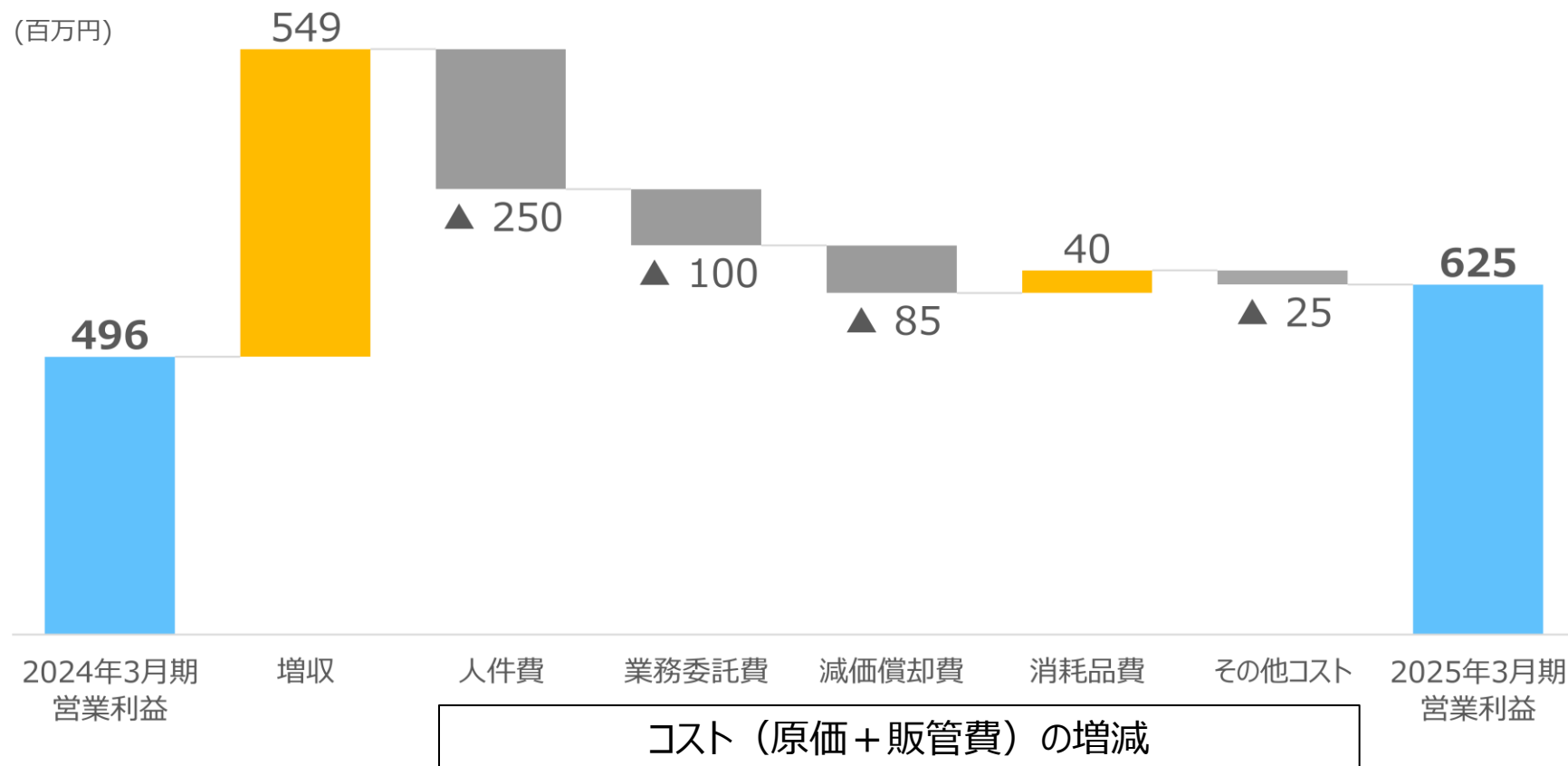
# 2025年3月期の見通し（1）

- 一次診療施設との連携強化により初診数増加を図ることで売上高は増収見込み
- 増収効果により営業利益は大きく改善見込み

(百万円)	2024/3期		2025/3期			
	実績	構成比	通期計画	構成比	前年比	
売上高	4,270	100.0%	<b>4,820</b>	100.0%	+549	+12.9%
営業利益	496	11.6%	<b>625</b>	13.0%	+128	+25.8%
経常利益	489	11.5%	<b>625</b>	13.0%	+135	+27.6%
親会社株主帰属 当期純利益	337	7.9%	<b>440</b>	9.1%	+102	+30.5%

# 2025年3月期の見通し（2）

- 増収がコスト（原価＋販管費）の増加をカバーし、増益の見込み



# 株主還元方針 配当の状況

- 2025年3月期の期末配当は25円を計画
- 2024年3月期初配当を実施

## 今後の利益還元策について

### 配当性向10～20%を基本方針

事業拡大のための投資と  
資本効率向上の最適なバランスを考慮

### 自己株式の取得

1株当たりの株主価値と  
ROEの向上を目的として機動的に実施

## 配当予想

	2024年3月期	2025年3月期（予想）
配 当 金	初配当 <b>20円</b>	増配 <b>25円</b>
配 当 性 向	<b>16.0%</b>	<b>15.3%</b>



## Ⅱ 市場動向および中期成長戦略

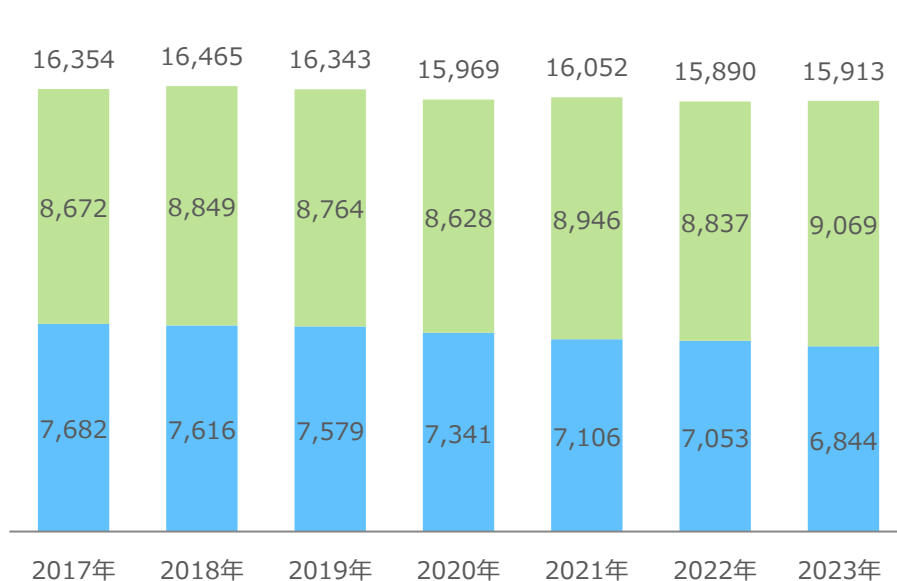


# 業界環境：犬猫飼育頭数は横ばい傾向が続く

- 2023年の犬猫飼育頭数は横ばいだが、「新規犬猫飼育頭数」は減少

## 犬猫飼育頭数

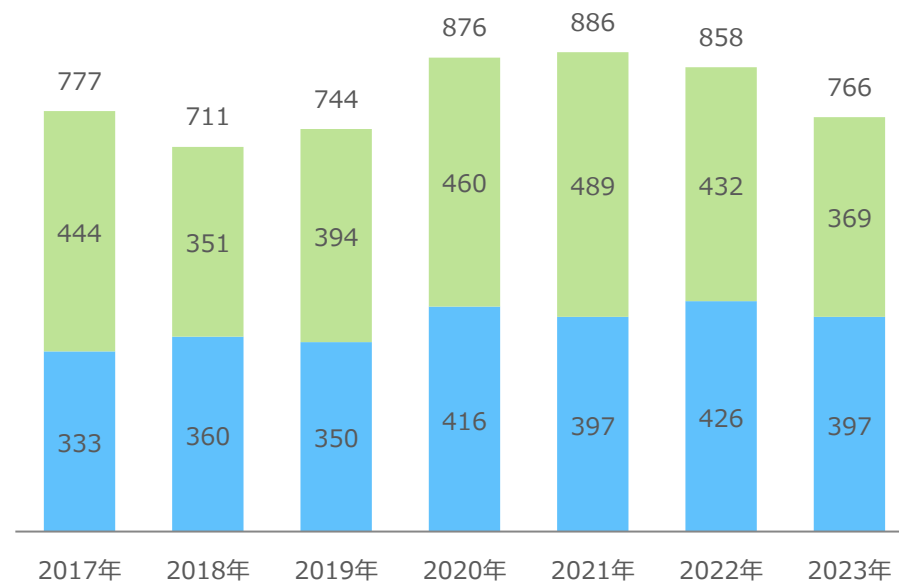
■ 犬飼育頭数 ■ 猫飼育頭数（千頭）



## 新規犬猫飼育頭数\*

\*統計、調査データ算出の1年前（1年以内も含）から飼い始めた人を新規飼育者とし、新規飼育者に飼われ始めた犬猫の頭数

■ 新規犬飼育頭数 ■ 新規猫飼育頭数（千頭）



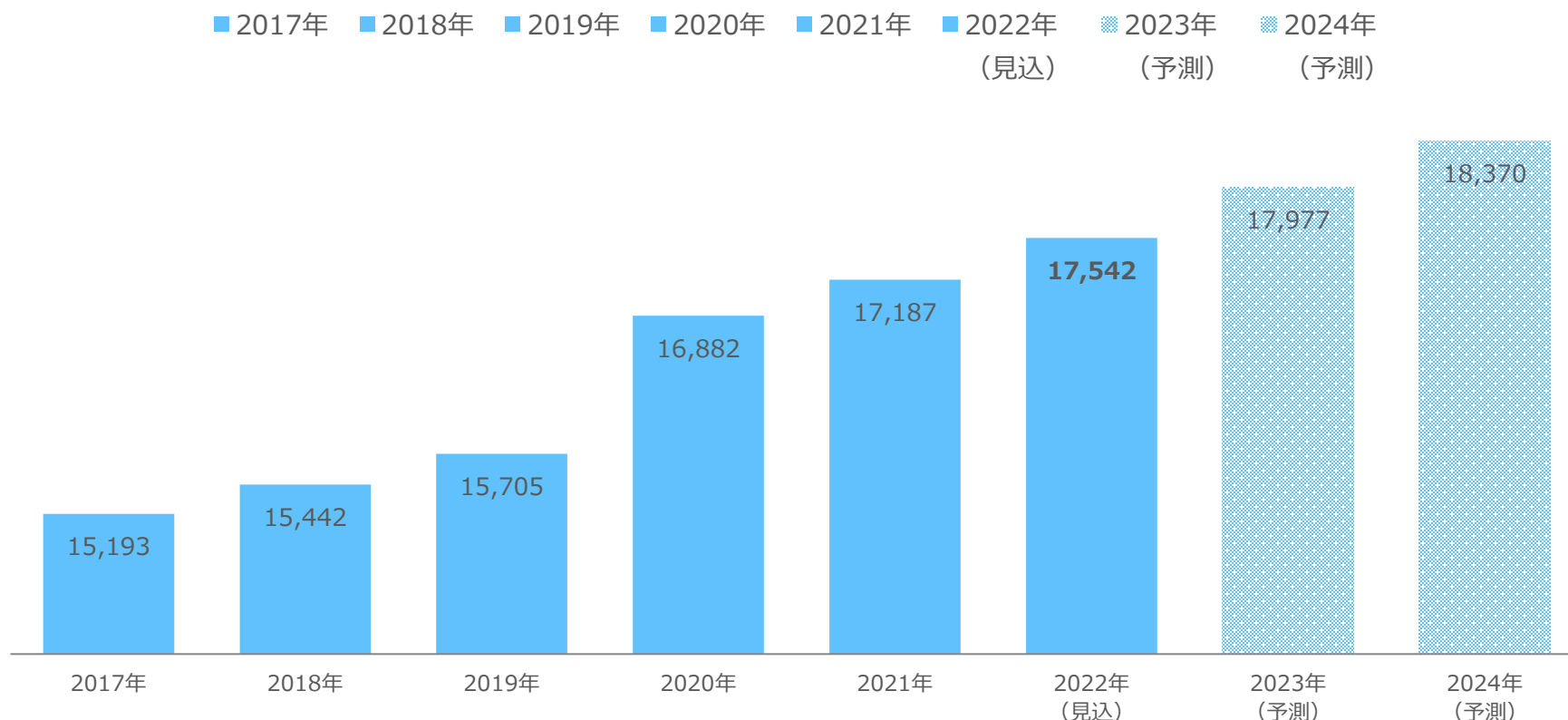
出所：ペットフード協会「令和5年 全国犬猫飼育実態調査」

# 順調に拡大するペット関連市場

- 人口減少や少子高齢化が懸念される一方、ペットの家族化で動物医療に対する多様化・高度化要請は増加
- ペット医療やペット保険等ペットビジネスの付加価値化、裾野が拡大し、ペット関連総市場規模は年々拡大傾向

## ペット関連総市場規模\*

\*ペット関連総市場：ペットビジネスをフード市場、用品市場、生体市場、その他（ペット周辺サービス市場）として捉えた際のペットビジネス市場全体



出所：矢野経済研究所「ペットビジネスマーケティング総覧2022年版」

①

学術活動と人材確保・育成

②

拠点の展開と連携病院数の拡大

③

事業の多角化と協業加速

## 関東・東京合同地区獣医師大会にて 学会長賞・奨励賞を **8年受賞**

2013年度	胸腺腫の猫に見られた剥脱性皮膚炎の1例	
2014年度	肺吸虫感染の犬の1例	
2015年度	腎瘻チューブ設置後に腎切開による結石摘出を行った犬の1例	
2016年度	プレドニゾンが奏効した猫消化管好酸球性硬化性線維増殖症の3例	
2017年度	ガイドワイヤーの使用により尿路確保が可能となった尿道異常の4例	
2018年度	外科的治療により長期生存している肝外胆管癌の猫の2例 硬化性胆管炎が疑われた犬の1例	2題受賞
2019年度	前腕の広範囲皮膚欠損創に遊離全層植皮術を実施した犬の2例 肝管空腸吻合を行った肝外胆管閉塞の猫の2例	2題受賞
	巨大な犬の原発性肺腫瘍に対する肋間開胸と横切開旋回開胸の比較	中部地区受賞
2020年度～	コロナ禍による行動制限の影響あり	
2023年度	稀な発作徴候を示し脳波検査によりてんかんと診断した犬の2例	

- 積極的な採用活動による優秀な人材の確保
- 獣医師や動物看護師、医療事務スタッフの育成

## 人材確保

### 優秀な人材の確保

- 大学・専門学校・各種団体との関係性強化、人脈形成
- 大阪病院の開院に伴い、西日本からの応募が増加
- 採用特設サイトをリニューアル中
- その他採用活動を積極的に実施



### 従業員の育成

- 豊富で多彩な症例と手術数/専門診療科による高度医療の習得
- 全科ローテーション研修プログラムの実施  
(農林水産大臣指定の小動物臨床研修診療施設)
- 各種セミナー・講習会の活用

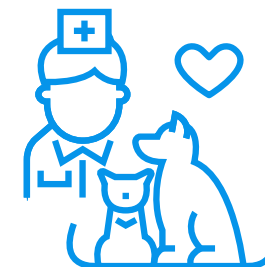


## 役割の拡大

### 動物看護師の国家資格化 (愛玩動物看護師)

動物看護師の国家資格化による  
役割の拡大、獣医師の負担軽減

業務の効率化・生産性の向上



出所：農林水産省/環境省  
新しい国家資格「愛玩動物看護師」ができました！  
(パンフレット)

- 従業員に対してインセンティブとして自社株式を給付

従業員に対して  
個人の貢献度や勤続年数等に応じてポイントを付与



一定の条件により受給権を取得したときに付与ポイントに相当する株式を給付

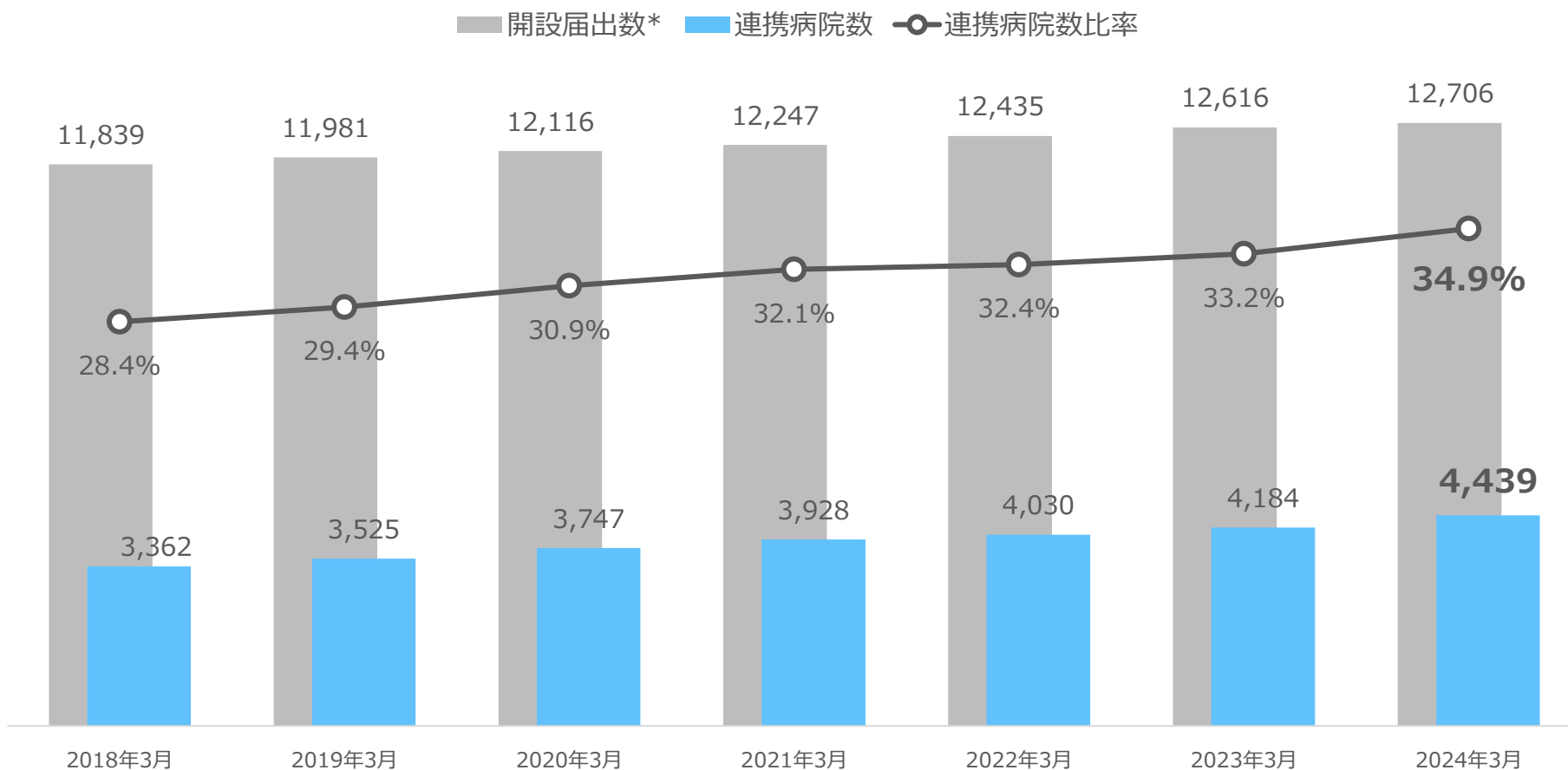
従業員満足度向上

従業員の株価及び業績向上への関心が高まる

持続的な企業価値が向上

# 連携病院数推移：全国4,439施設へ増加

- 2024年3月の連携病院数は+255件（うち近畿地区+208件）と大幅に増加
- 連携病院数比率は34.9%に上昇

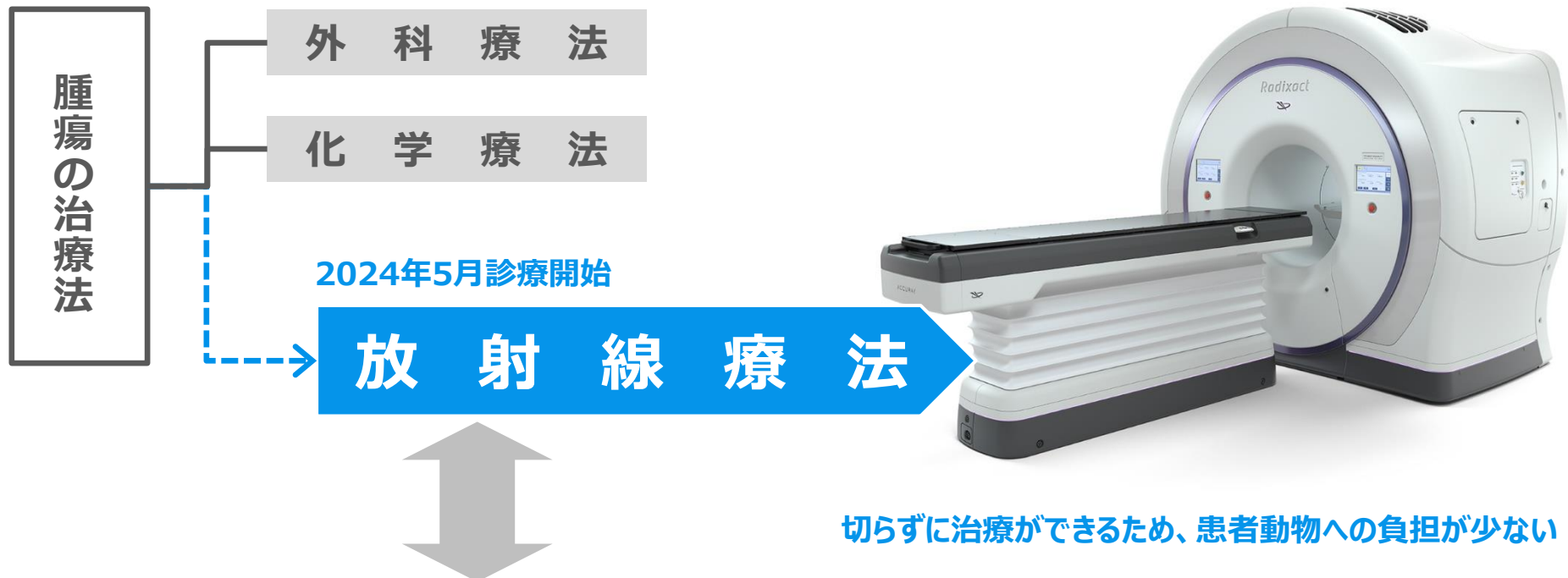


\*開設届出数は農林水産省（令和5年12月末時点のその他小動物診療施設の件数）



# 大阪病院における業務領域の拡大

- 放射線治療棟と放射線治療機器の購入を実施
- 近畿地区全域から症例紹介受け入れに努める

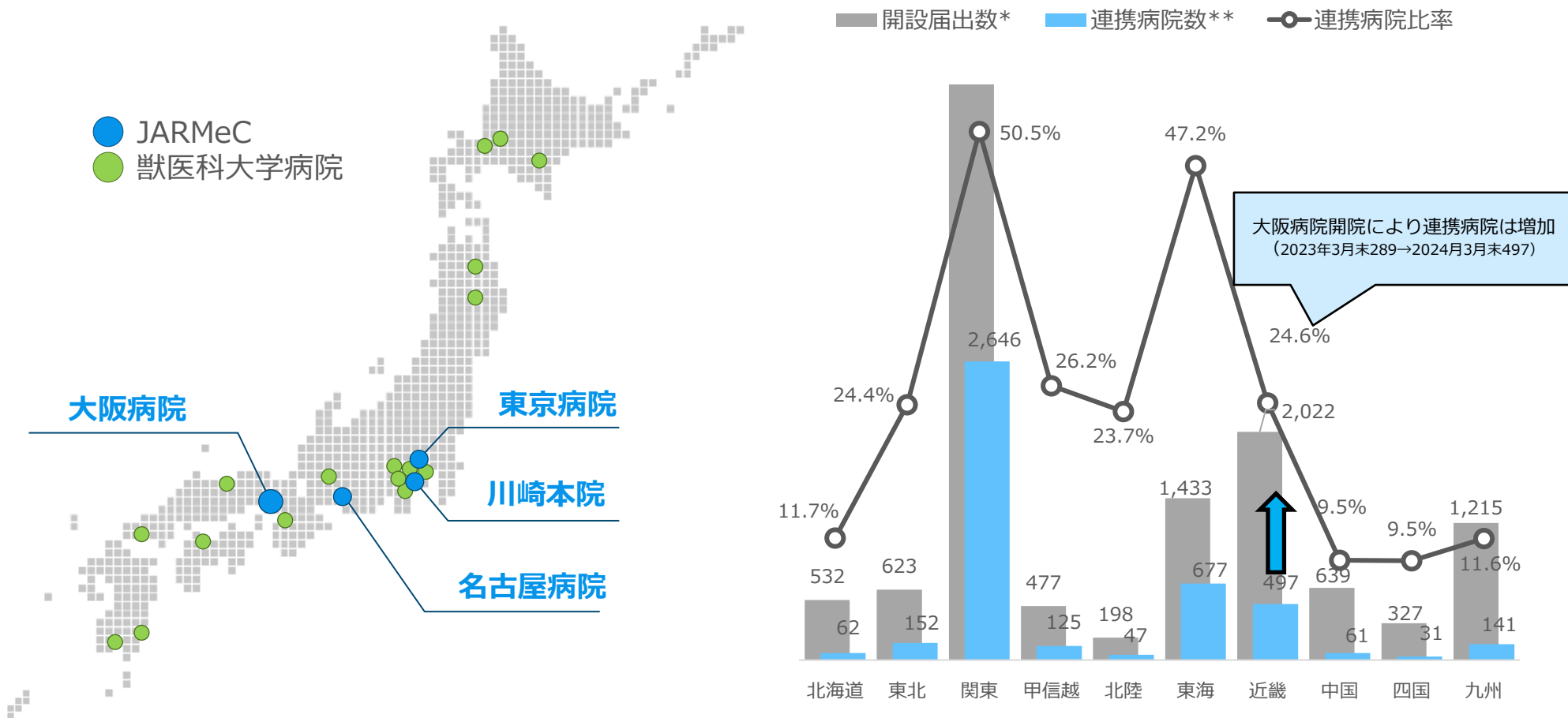


近畿地区における動物の放射線療法の行える施設は限定的

事業領域は拡大

# 今後の拠点展開

- 大阪病院開院により、関東、東海エリア同様に関西エリアを中心に連携病院比率の引き上げ
- 早期の新病院開院に向けた物件選定及び企画検討が進行中



\*開設届出数は農林水産省（令和5年12月末時点の小動物診療施設の件数）

\*\*連携病院数は2024年3月末時点の件数

## 事業領域の拡大

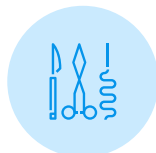
- 患者動物・飼い主に寄り添い、一次診療施設を多方面からサポート



診療外領域においても利便性を高めるシステムやサービスの開発・販売を検討



- 動物医療に関連した事業の買収を積極的に推進



医療機器



保険



ペットフード



医薬品

## 活動量計「プラスサイクル」を使用した取り組み



- 動物の日常の活動量を測定し、動物の「元気」を「可視化」



一次診療施設（動物病院）  
経由での普及促進



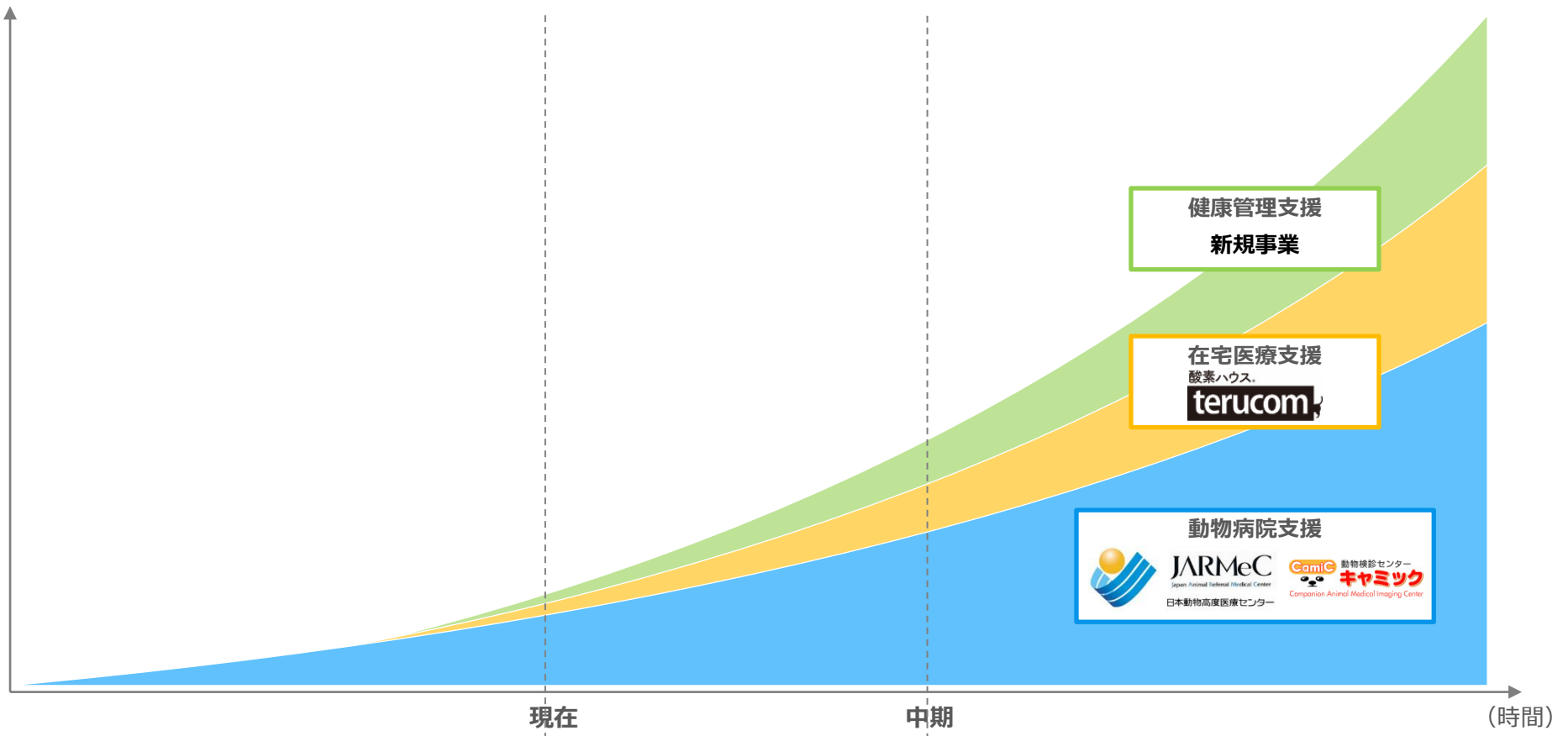
複数の企業・大学・研究機関との協業

## 動物医療業界における総合的企業へ

# 中長期成長イメージ



- 短中期では、二次診療動物病院の拠点を全国的に展開しつつ、動物医療に関連する事業買収等の新規事業取り組みにも着手。一次診療施設との連携を強化し、既存事業の拡大を図る
- 長期的には、事業領域を動物の健康管理等多方面に広げ、動物医療業界における総合的企業としての地位確立を目指す

(事業規模)




# appendix

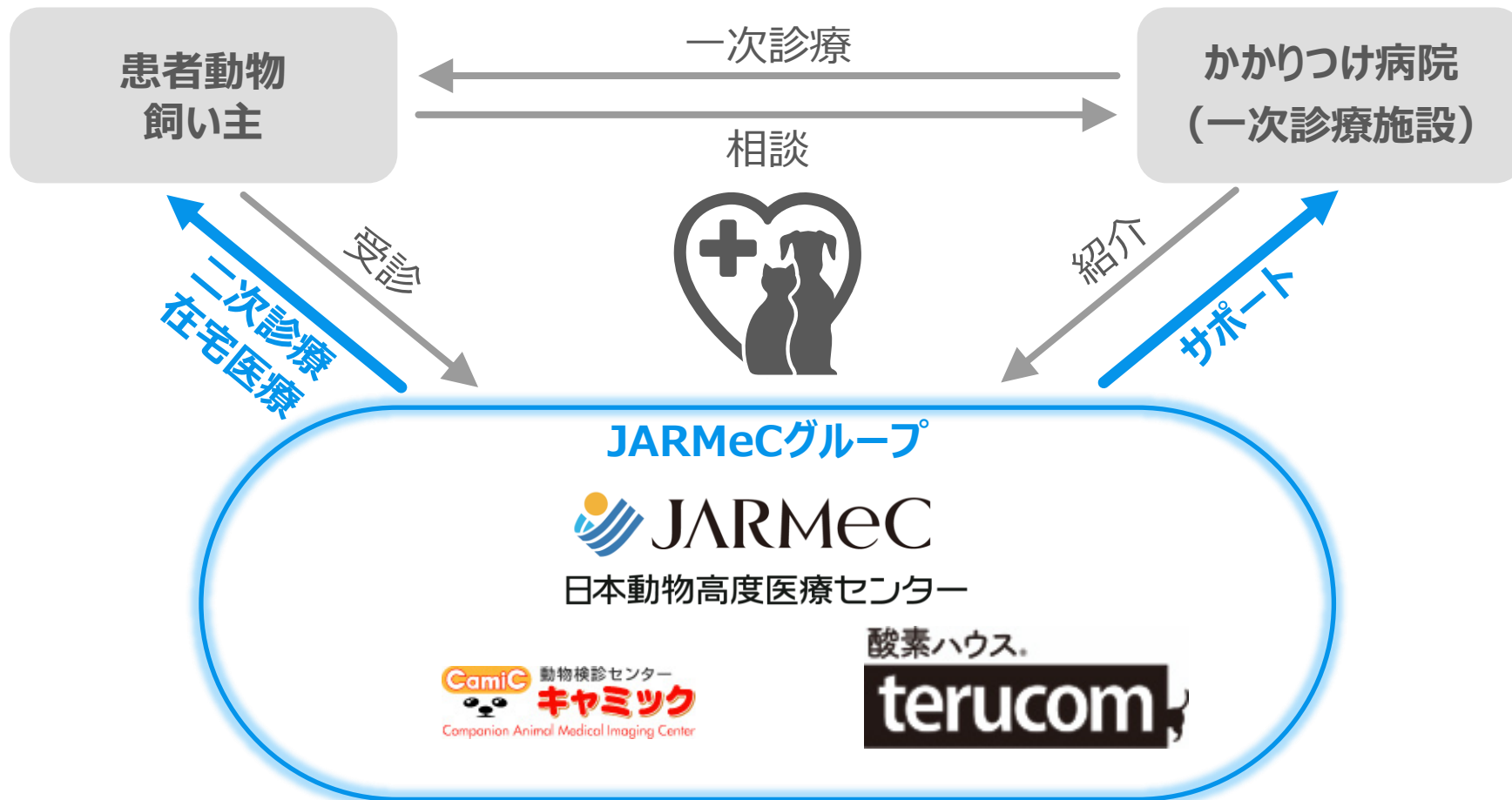


会社名	株式会社 日本動物高度医療センター
	<b>Japan Animal Referral Medical Center</b> : <b>JARMeC</b>
主要な事業内容	犬・猫向けの高度医療（二次診療）を行う動物病院
所在地	<p>川崎本院 : 神奈川県川崎市高津区久地 2-5-8</p> <p>東京病院 : 東京都足立区一ツ家 3-1-7</p> <p>名古屋病院 : 愛知県名古屋市天白区鴻の巣 1-602</p> <p>大阪病院 : 大阪府箕面市船場西 3-14-7</p>
設立年月日	2005年9月26日
資本金	797百万円
代表取締役社長	平尾 秀博
従業員数	298名（非常勤36名を含む）※グループ全体（2024年3月末現在）
関連会社	<p>株式会社 キャミック （高度医療機器を用いた動物の画像診断センター運営）</p> <p>テルコム株式会社 （動物用酸素濃縮器等の製造・販売・貸与）</p> <div style="text-align: right;">  <p>動物検診センター <b>キャミック</b> Companion Animal Medical Imaging Center</p>  <p>酸素ハウス。 <b>terucom</b></p> </div>

# 沿革

- 
- 2005年9月 株式会社日本動物高度医療センターを設立
  - 2007年6月 川崎本院を神奈川県川崎市高津区に開業
  - 2009年3月 「小動物臨床研究診療施設」として民間で初めて農林水産大臣の指定を受ける
  - 2011年12月 名古屋病院を愛知県名古屋市天白区に開業
  - 2014年1月 株式会社キャミックを子会社化
  - 2015年3月 東京証券取引所マザーズ市場に上場（動物病院として初の上場会社）
  - 2017年6月 キャミックひがし東京を東京都江戸川区に移転開業
  - 2018年1月 東京病院を東京都足立区に開業
  - 2022年2月 キャミック城北を埼玉県さいたま市南区に移転開業
  - 2022年3月 テルコム株式会社を子会社化
  - 2022年4月 東京証券取引所グロース市場に移行
  - 2023年6月 大阪病院を大阪府箕面市に開業
  - 2024年5月 大阪病院で放射線治療を開始

## 当社のビジネスモデル



- ✓ **二次診療を中心とした事業により、**  
**「ペットに家族と同じように高度な医療を受けさせたい」というニーズに応えます。**



＜見通しに関する注意事項＞

当資料に記載されている内容は、いくつかの前提に基づいたものであり、将来の計画数値や施策の実現を確約したり保証したりするものではありません。

＜お問い合わせ先＞

株式会社日本動物高度医療センター  
管理部 IR担当  
044-850-1320  
e-mail : ir@jarmec.jp